

芥川だより

編集発行人 下村嘉明

発行所 着物から服を仕立てます 梵

高槻市芥川町2-14-3

Tel.072-681-8870

発行日/2007年1月20日

ご希望の方にはお送りします

お気軽にお問い合わせ下さい。

e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp



芥川の写真屋さん

ばあさん曰く“天国のような日々”

朝早くから毎日ゲートボール場に、80から90歳をこえる5人のおばあちゃんが集まる。私の母もその一人である。焚き木をごうごうと燃やし、そのまわりで持ち寄った茶菓子を食べながら大声で笑い、話に興じる。身体が暖まればゲートボールを始め、にぎやかに昼過ぎまでゲームを楽しむ。終わり時に誰かが「おいしいもん食べにいか」と言えば、「いこいこ」とすぐに話がまとまり、近くの道の駅に電話をする。常連さんだから迎えの車がすぐに来る。歳とるのを忘れてるみたいに元気な5人、みな後家さんである。

母は、昼から暗くなるまで野良仕事をする。電動三輪車でどこへでもいく。腰が曲がり小さくなった母が「天国みたいに幸せや」と目を細めて言う。この「芥川だより」をメガネをかけずに一気に読み、「ああおもしろかった。みんなあ上手に書いとってや。お前もまんざら阿呆ではなかったんや

な」と笑う。「雪が降って野良仕事ができない時にわたしも書くわ。「なに書く?」。「やっぱり、これまでの人生で一番困った時のことを書かなおもしろくない」。この尋常小学校卒の百姓のばあさんは、日記をつけるのを欠かしたことがない。なかなか上手いかもしれない。おふくろ、ハマるやろなあ。楽しみがまたひとつ増えよる。私にも歳を重ねた先にこんな天国があれば、と願う。(嘉)

芥川商店街歳時記

- 日本棋院棋士 谷村義行八段による 大盤解説、指導碁 毎月第二日曜日午後2時半より
日本棋院高槻支部・芥川囲碁サロン
- フィナンシャル・プランナーによる保険見直し相談会(無料)
毎週土曜日・日曜日(要予約)
保険の身近な相談所・総合保険事務所 ☎0120-801-836
- 第四回 楽の会 亀屋寄席(笑福亭 風喬・旭堂 南陽) 割烹旅館 亀屋
2月4日(日曜日)午前10時半開場。11時開演。会費、2,000円、満席になり次第、締め切ります。

☆☆☆ 投稿記事 随時大募集!! ☆☆☆

アルバイト・パート募集中!! 興味のある方求む!!

芥川の写真屋さん 時給800円～。時間相談に応じる

☎ (072) - 681 - 6883

男性で結婚しない人がとても多い。女も含めて、私の周りにも、知人達の弟妹などにも、三十歳以上の独身男女がひしめき合っている。

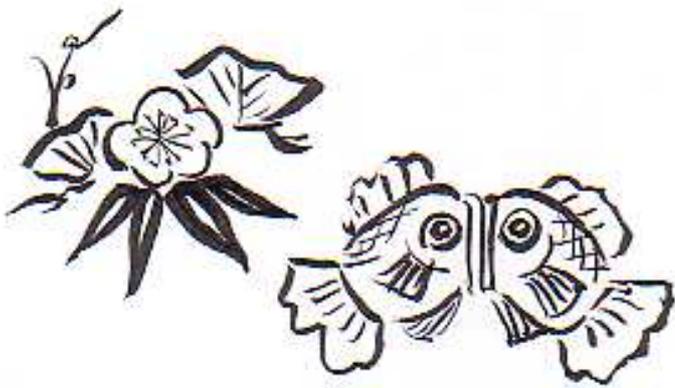
うちの何が、などと言いつせば、すぐ、うちにもいるわ、という声を聞く。そんな男たちに共通して言えるのは、まず社交性がないことと、理想が高いこと。女は、何事にも意欲的で、キャリアウーマンとかいわれ、仕事でも活躍し、多趣味で行動力もある。彼らの相手にふさわしい年齢の女たちは輝いて見えるのはなぜ。それなのに、当の男性はただに良妻賢母型の女を求めているのはなぜ。

この差はなんなの？ 自分が社交性がなかったら、社交性のある女を求めればよいのに、それが私には理解出来ない。そういう女を嫌って、自分を立ててくれる人がいない、月の砂漠を散歩しようとする時代に乗り遅れているんじゃないの。でも私も含めて言えることは、昔の、たとえば親に嫁げと言われたら、顔も見ずに嫁いでしまった女達と比べたら、あばずれ女でない人の方が少ないのではと思うけれど、如何かな。何回か、お見合いの話もしたけれど、趣味が合わないのと

いうのが断りの文句。口実なの？ 結婚に興味は関係あるの？ この年になってイロイロ思いを巡らしている昨今。

男、女を問わず、平凡な生活は送れるけど、何か物足りないのと言う。この言葉、マジメだけの人を選ばない本音だと思う。そして大きく言うとう未婚、既婚を問わず、ゆれる世代共通の思いだろう。もういや、平凡は魅力がない。

離婚がうなぎ登りの昨今でも、若い女性の関心は結婚。それに対する認識の低さを何とかせねばならない。



老いて考える

「妻をめとらば才たけて
顔（みめ）うるはしくなさけある
友をえらばば書をよんで
六分の俠気四分の熱」

歌人と謝野鉄幹のうたったこのうたは、いつの世にあっても、男といわず、女といわず求めずにはいられない理想の女性像だといえるのだろう。

人間として、自分として、生き甲斐ある人生をおくったといえるのか。まだまだ勉強をしなければと思っている。目鏡ごしに、新聞を注意深くよみ、テレビや映画を観、本を読み、講演会にも参加し、たえず新しいことに目を向けていく。ちよつとおそいかなア、でもこんな老いもあつてよいのかも。

ところで世の中には、全く手ぶらで歩くのが好きな人がいる。私もその一人。荷物をもつのが苦になつてきた老い。街角に売られているいろんな弁当。何処かへ出かけてゆく度に買って食べてみた。口にあわないというよりも、日の丸弁当がなつかしい。なんともいえない味。

自分の手で作る味を大切にしたいと思う。たのまれてなくても人の分までも。弁当位買ったらいのに

と言う。いくらこちらが心を込めて作っても、そんな人には通じないことがわかる。ただの押し付けだったのだ。苦心して作った手作りも、宙に浮いてしまうこともある。

人はそれぞれ得て不得手がある。食欲のない時は、おにぎりを作って、ひとりで食べる美味しき。若い者は、体裁のよい弁当ばかりに目をくぼる。私のおにぎりも食べておくれ。老いの言い分。



寝ずに考えた結論

梵店主

あらすじ

大学に入学したよっちゃんは、山岳部に入り、初めての合宿に参加した。冬の剣岳・早月尾根の最初の夜に「どうしたらバテないか」寝ずに考えた。

よっちゃんは昨日、最後のピッチでバテてえらい目にあつた。これまでの人生の中で一番と思える辛さだった。四回生から一発食らつたが、意識もうろうの状態だったためか、痛さは感じなかつた。今日は昨日のようにはいかないだろう。早月尾根の稜線に出たかには、なんとしてもバテない方法を考えなければ…。いろいろ考えてよっちゃんが到達した結論は、トップを行く二回生にピタツと付いて歩くことであつた。二回生の担ぐキスリングによつちちゃんの頭が触れるぐらいに接近して離れず歩くこと、そうすれば、二回生には申し訳ないが、彼はプレッシャーを感じるだろう。

ラッセルによる体力の消耗と後ろからの精神的プレッシャーを受けることになる。抜群に強い二回生といえども、少しはペースが落ちるはずだ。そうなればよっちゃんは付いていけない。まあ

そんな思案を巡らせながら、いく度もライトで時計を見た。

やつと三時半になつたので、寝袋のファスナーを開けてテントの入り口の紐を緩め、顔を外に出し天気を確認する。寝ているリーダーに「天気は曇、風は強いです。温度はマイナス十一度」と報告する。するとリーダーから「エッセン始め。その前にテントの除雪」の指示。先輩たちはまだ寝ているので、静かに完全装備に整え外に出る。真つ暗闇の中ライトで照らして雪の降る様子を見ると、昨夜寝る前よりは幾分マシになっている感じである。風は相変わらず強い。テントに付いている雪はよく落としておかないと、コンロの熱で融けてテントが濡れる。丁寧に手袋で払っていると「エッセンせなあかんから、早く入れ」という声が出た。水をつくる雪のブロックを足してから、テントの中に入る。

「早ようせい」とせかさされ、昨夜寝ながら反復練習した手順でエッセンを始めた。まずコンロに火をつける。その上に鍋を置き、昨日つくっておいたテルモスの水を注ぐ。次に外の雪を軍手で掴み鍋の中に入れスプーンで雪を潰す。そうして、ラーメン、茶、行動中のミルクティー用の水をつくる。ラーメンの麺は粉々つぶしてあるから、

すぐにできる。ふやけると食べられないうぐらい油っぽくドロドロになるので、みな残してしまいが、よっちゃんはその残りの分もよく食べた。少しでも多く食べないとバテルという恐怖感があつたのだ。味をとやかく言つてはおられなかつた。

そんな具合だから、みんなはすぐに食べ終わり、出発の用意をはじめめる。

よっちゃんが食べ終わって食器やコンロの後始末をするころには、先輩はもう既に完全装備でザックを持って外に出はじめめる。とにかく朝は何もかも早くしないと叱られるのである。素早くキスリングの中にコンロ、食器、食料、個人装備などを放り込む。ヘッドランプをつけて急いで外に出ると、すぐにテントをたたむ。テントについた氷をブラシで落とし、落ちないのは手でもんで落とす。そしてゴワゴワになったテントを両側から力一杯押さえて巻いてゆくのである。湿気を含んだテントは凍って、大きさも重さも本来の倍近くにになっている。

キスリングの底にシュラフを入れ、その上に食料の入った一斗カンを二個縦に並べ、次に食器やコンロ、個人装備を詰め込む。一番上に大きくなったテントを無理やり押し込み、テントのポール、スコップをくくりつける。両

サイドのポケットには、二リットル入りの石油ポリタン、昼飯のビスケット、安全ベルトなどをぎゅうぎゅう詰めに、ふたをする。これだけのものをパッキングするだけでもさうとう疲れ。早くしないと怒られるから必死だ。先輩はほとんど手出ししない。エッセンからテントをたたむまで、もっぱら下級生の仕事である。

問題はボンなのである。出発直前に行くこと怒られるから、テントをたたんだらすぐに、素早く済ませないといけない。山屋に持ちが多いのもわかる。ポンをしているときも、先輩はタバコを吸いながら「遅い、早ようせい」と怒鳴っている。これらの作業を三十分ぐらいですませ出発する。

五時から今日のワンピッチが始まる。よっちゃんはライトの明かりを頼りに歩きはじめる。風は強いが、降雪は少ない。



肺炎

《山猿の介護日誌》②

お袋が植物状態になって三年半、風邪を一度ひいたくらいで、さしたる病気を患うことなく平穩に過ごしてきた。健康が維持されているということは、介護する側にとっても心の平安が保たれる。そんな日常が一変したのは年瀬せまる十二月二十日だった。もっとも恐れていた事態が起こった。

変調をきたしはじめたのはその三日前、十七日である。入浴サービスから帰宅したとき、いつもとはちがう低いうなり声を発した。それは、何かの痛みを訴えていることを示している。上体を起こしたとき、痙攣したようにからだ全体をこわばらせ、いったん息を止めてからうなり声を上げる。腰を痛めたにちがいない。施設に問い合わせると、車いすに乗せるとき、上体をまげすぎたことが原因らしい。以前にも腰を痛めたことがあったが、一週間くらいでよくなった。痛がる姿を見るのは忍びないが、しばらくすればよくなるだろうと思っていた。

体位を交換するときや、上体を起こすときに痛がる。そのとき発する「うっ」といううなり声とともにむせるようになった。

翌十八日は一日中むせて咳き込み、のどを痛めてしまう。痰がからみ、風邪をひいたようなしわがれ声であるが、熱はない。

腰痛や風邪も心配だが、排尿がいつもより少ないことが気になりはじめた。十九日の朝、いつもあるはずの排尿がない。オムツを取り替えた夜中の一時以降ないということだ。こんなことはいままでになかった。朝食をすませ、三十分以内にお通じと排尿があるのだが、それもなし。昼近くになって、ない。これはどこかおかしいと思ひ、かかりつけ医に連絡すると、十分ほどで看護婦がやってきた。尿道に管を取り付けてもらおうと、大量の尿管があった。ひとまず安心だが、尿管はできるだけ早くはずすようにたのんでおいた。オムツを取り替える手間が省けていいという人もいるらしいが、体につける異物は、栄養剤を注入するための胃ろう管だけでいい。

十九日の夜になっても咳はおさまらない。痰がからんで呼吸が苦しそうだ。日付が変わるころには呼吸が速く、しかも浅くなってきた。体温が上がりはじめ、明け方四時には三九度になった。ますます呼吸が速くなり、いつもより三倍くらい速い。六時すぎにかかりつけ医に電話して、状況を説明すると、

肺炎にちがいないから入院させようという事になった。

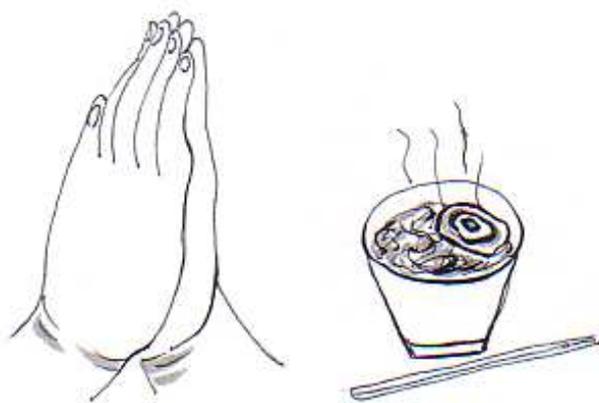
医師は病院に電話をして入院の受け入れを要請し、僕は一一九番に電話する。住所と名前を告げると、救急車がもう出たという。と同時に、サイレンが遠くに聞こえた。救急車は、目と鼻の先にある消防署から二分ほどでやってきた。すぐに酸素を吸わせ、病院に向かう。見あげると寒空に星がきらめいている。あたりはうっすら白みはじめていた。

十五分で到着した病院で、採血と点滴が行われる。当直医が血液検査の結果とお袋の病状を診て、「たぶん肺炎ですが、それほど重篤ではありません。二週間くらいの入院になるでしょう」という。その言葉を聞いてひとまず安心した。通常の診療時間となって、レントゲン写真を撮り、治療がはじまる。病棟に移動するころには三七度近くに熱は下がっていた。順調にいけば、年内にも退院できそうだ。

一週間経って、主治医が「もうだいぶよくなっているから、年末には退院できます」という。その矢先、こんどはノロウイルスに感染してしまった。嘔吐は一日でおさまったが熱と下痢は大晦日までつづいた。お袋のような高齢者はなおりが遅い。退院はのびて、

正月明けとなる。

年の終わりに僕はかならず蕎麦を食べる。年越し蕎麦の由来は諸説あつて、切り蕎麦は一年の苦を切り捨てるとか、家運をのばすといういわれがある。大晦日の夜、この年の災いはこの日で断ち切れよと念じながら、蕎麦をすすった。



一級河川「芥川」の水は、少しづつきれいになってきている。

魚が遡上できるように、魚の道（うおのみち）確保の計画が、着々と進められていると聞く。魚の道が確保できると、清流の香魚といわれるアユが、この芥川をさかのぼっていくのだという。そして、冬には、下流で産卵し、ふ化した幼いアユは、流れと共に海に出て稚魚となり、やがて、再び芥川に戻って、遡上していくらしい。

メダカ、カワニナ、ホタルの復活も、そんなに先のことじゃなさそうだし、昔の姿に少しずつ戻っていく芥川への期待がふくらむ。

阿久刀神社の東にある門前橋付近では、冬の今ごろは、鳥たちの生き生きとした様子を眺めることができる。首が緑色のマガモたちが、子供らを引き連れて、気持ちよさそうに水面に浮かびながら泳いでいる姿。その上を、ユリカモメの大群が、すばやい動きで飛び交っている。川の上空で、そんなに遠くへは行くことなく、あそんでいる。たくさん鳥たちが大にぎわいである。ここは、さながら、鳥の樂園といつてもよさそうな光景だ。

川下の芥川橋までの並木道は、草木が萌え出る頃には、見事な桜トンネル

に変身、毎年のことだが、花見の人達で大にぎわいとなる。門前橋から芥川橋までのこの通りの愛称を市民に公募し、決まったのが「ゆめ桜通り」という名。「夢が咲く通り」ということでもあるらしい。

芥川橋は、西国街道そのものである。橋のたもとから街道を東へ三十メートルほど行くと、北側に古びたお堂がある。ここは、芥川町四丁目である。

お堂の中には、石で創られた地蔵さんが祀られている。それも一体ではなく、三体もある。いや、四体と言ってもよいかもしれない。というのは、中央の地蔵さんの胸には、やさしく抱かれた赤ちゃんがいるのである。赤ちゃんも、一体の地蔵さんであるとする、四体ということになる。

向かって左側の地蔵さんは、背が高く、たぶん男性であろう。眼光鋭く、そこかしこに目を向けているかの如き姿は、中央の母子地蔵を守っているようである。右側の地蔵さんは女性であろう。一歩さがって、腰を低くしており、中央の母子地蔵にかしずいているかのように見える。

いずれの地蔵さんも、顔は白く化粧されており、かわいい赤ちゃんのお顔にも化粧がほどこされている。中央の地蔵さんの表情は、柔和そのもので、

やさしさいっぱいといつてよい。そのまなざしは、自分の胸に抱いている幼な子に注がれており、慈しみに満ちあふれていると、私には感じられる。幼な子は、くりくりとした、明るい瞳をしており、母のまなざしに満足しているかのように見受けられる。

この地蔵堂でお参りをしてきた人達の願い事は、子供にかかわることが断然多かったにちがいない。子供の命、健康のこと、子育て上でのさまざま。それは、赤ちゃんを抱いた地蔵さんが、ここに祀られていることに縁るのであろう。親の力ではどうしようもないことがら、例えば、病におかされて、命が危ういという状況の子供のことで、地蔵さんにすがって必死になつてお願いをするということも、時にはあったことであろう。

これからの時代、祈願する内容とか回数、確かに変化していくことであろうが、人が生きている限り祈願そのものはなくなることなく、いつまでも続いていくものと思う。

地元では、この地蔵さんのことを、「子育て地蔵」と呼んできたようである。それとは別に「マリヤ地蔵」と呼んでいる人たちも結構いるときく。どちらも、当を得た呼び方なので、私は、感心しうなずいている。

第16回 たかつき市民

民 踊 ま つ り

交通事故被災者救援チャリティー

●とき 2月4日(日) 午前9時30分開場 10時開演

●ところ 高槻現代劇場大ホール (入場無料)

主催 日本民踊研究会 豊史会・都市交通を考える会

カルタ取り

—逢いみての のちの心にくらぶれば
昔はものを 思わざりけり

「百人一首やるから来ない？」と誘われる。行きたいなあと思いながらお雑煮を食べている。もう気もそぞろである。おちつかないまま父や母の顔を見る。行ってもいいとは言わないが、首をちよつと動かせてにこつとしてくれた。まあいいやというふうである。

そつと抜け出したら、もうこっちのものだ。裏隣の弁護士さんの家で、近所の子供たちが寄つて毎年恒例のカルタ取りを一時頃からする。行くと、もう近所の子供や、年上の姉さん兄さんもいる。しばらくして、隣のゆきちゃんも来た。男の子達の隣に座る勇氣もなくて後ろから様子を見る。おばさんがみかんを持って手招きをしてくれた。おじさんの隣に席を用意してくれたので、ほつとひと安心。

初めてのカルタ取り。今まで顔も知らない人の中に座り、様子を見る。小父さんが咳払いして私の隣に座り、おもむろに読み札を取り上げて「お手つきなんぞしてはいけないよ」と言う。下の句を書いた札が赤白に分かれて赤

組・白組に五十枚を自分の責任枚数だけ受け持つようにして、並べる。最初、私は皆の様子を見ることにした。ゆきちゃんが私に一枚預けた札を自方の前に置いて、札を読んでみる。「をとめの姿しばしとどめむ」と書いてある。この札はねえ……、と読み手の小父さんが教えてくれた。

まず一番先に作者の名前を呼ぶ。早い人は、その作者の名前を読んだだけで札を取ってしまう。ぼんやりしてられない。皆真剣に札を並べている。いよいよ読み出しである。「はい、始めますよ」の掛け声の後「清少納言」と読み始めた途端に中学生の人が「はい」と一枚かっこよく札を飛ばした。まあ勇ましいと男の子の顔を見て、また札を見つめた。次は「柿本人麻呂」と言っても誰も取らない、続いて「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の」と上句を読んだところで、この家のお姉さんのやっちゃんが取ってくれた。こうして私は初めてのカルタ取りの仲間入りさせてもらった。

名前と句を読み上げていく小父さんの七・五調のアクセントの最後に、その下の句を二回読む。何枚か読み上げていく中で「をとめの姿しばしとどめむ」という句を思い出し、自分の前の札であることに気付き「はい」と言っ

て取った。なんだか嬉しくなった。「天智天皇……、秋の田の仮庵の伊庵の苦をあらみ……、わが衣出は露に濡れつつ」と、一首ずつ読みすすむうちに札がなくなつて、一回目の接戦は終わった。

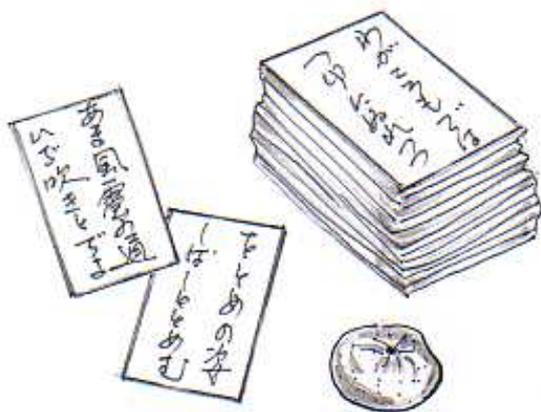
弁護士さんの家は、両親と兄さん姉さん、たけちゃんの三人兄妹らしい。「もう一度、お父さん読んでよ」。「一休みしてからね」ともう一度取り直し、私は札を五枚もらつてお姉さんの隣に座った。少し落ち着いて周りを観察出来るようになった。二度目の勝負が終わったのは四時頃だったろうか。

みかんとお菓子をもらつて「またあしたね」と言つて玄関へ出たら、ゆきちゃん、たけちゃん、やっちゃんが待っていて「お好み焼き屋へ行かない？」と誘つてくれた。私は行ったことがないので「何するところ」と聞くと「お腹が減ったから、好きな物を焼くんだよ」と言う。まあついて行ってみようよと、お年玉の入ったがま口を握つて行くことにした。

歳を重ねることによって思いもかけない幼い頃の思い出や、なつかしい人達のことやよみがえってくる。あの時に教えて頂いた「百人一首」の五・七・五のうたを懐かしく思い出される。あれから女学校に行つても、頭の底にこ

びり付き、今頃になつてもひよつと思ひ出す。

幼い頃の思い出の五・七・五・七・七と音律の良い和歌はなりを潜めて俳句ブームの昨今ですが、こうして五・七・五・七・七と歌い上げてゆく和歌の魅力は又格別と思われまふ。カルタ取りの勝負となつたら息もつけぬ位の緊張さの中での接戦が、昔は各地で行われ、競り合つて、中央に出て日本一を決めたものであるが、今でもしているのかなー。と、これまた独り言。



◇魚あれこれ◇
スズキ (鱸) ①

周防 春日丸

スズキは、ブリやボラと同じように、成長するたびに呼び名が変わる出世魚である。全長は最大で1mを超える。背は青黒く全体に銀白色に輝き、形はあくまでもスマートな流線形。精悍ななかにもどこか上品さを感じさせる。姿は「鯛に次ぐ美魚」であると言われるが、見るたびにほれほれする一番好きな魚である。

口は大きくて喙(くちばし)が前方に突き出しており、下顎が上顎より前に出ている受け口をしているため、下側から追い上げるようにして餌に食いつくが、前歯は餌に噛み付いて捕捉するためのもので、大部分は丸飲みし胃袋へ送りこんでいる。生き餌狙いの大食漢である。

スズキが餌を見つけるのは視覚によるが、近づいて食いつくときは餌生物の振動を捉える振動感覚(顔面にある側線感覚器官)が決め手、クルマエビなどピョンピョンと跳躍しながら不規則に遊ぶものに好奇心を示し、釣り餌として複雑な泳ぎをするルアー(疑似餌)が使われる。直線的で単調な等速運動をしているものには餌であっても

見向きもしないというわけである。

鰓蓋(えらぶた)は鋭利な刃物の如く、「エラ洗い」と呼ばれるように、釣られるときに力の限り抵抗を示し、水上に頭を振って鋭い鰓蓋で切ってしまうのであるから釣り人泣かせでもあり、釣りの醍醐味でもある。尾ひれはハート型に切れ込んでいる。スズキは夜行性で、朝まずめと夕まずめから夜半にかけて活動する。産卵期は冬で、低気圧が通過して風が強く吹く日に行われ、寒波が襲来するとスズキの移動が激しくなり、これが産卵を誘発するといわれている。(冬のヒラメ、春のマダイ、夏のスズキと誉れ高いが、冬のハラブトも脂がのって美味といわれる)

「古事記」には大国主命が出雲の国で宴を催したときにスズキが卓を飾ったとあり、「万葉集」には柿本人麻呂がスズキを釣る海人の釣り舟と出会ったときの情景を詠んだ歌があり、「平家物語」には平清盛とスズキの話があり、貝塚から骨が見つかったことから、高貴な人々から庶民も広くスズキを食べていたようである。

スズキは海にも川にもいるためか、環境の良否を判定するときによく使われる魚で、公害魚のように思い込み絶対に食べないという人もいるようである。

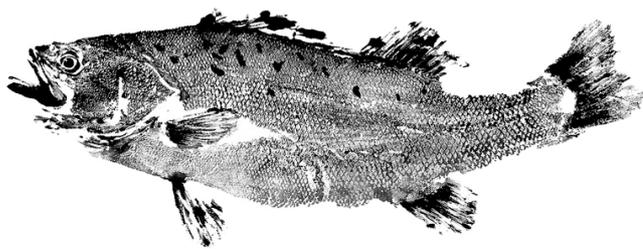
梵日記 5回目

接客業とはおもしろいもので、お客は販売員を観察して「あの店員さんはいい人だ、あの人はもうひとつだ」などと言ひ、販売員も客を見て「あつちの客はいい人だが、こつちの客は売つたらえらい目に会うで」なんてことを言いながらやっているのである。

千日回峰をしたと言う奈良の僧を観察して、私は本当だと思ひ、家内は嘘だと言つた。これくらい人を見る目は判断が分かれるのである。

千日回峰と言へば、山岳部の先輩が言つた言葉を思い出す。「千日回峰は七年間かけて千日で歩く、距離は地球を一回りする長さである。この長さは、大学山岳部の四年間に歩く距離に匹敵すると言ふ。もちろん卒業後も歩き続ける者も多いから、我々山屋も修験者のような者だ」。

この言葉が記憶にあつた為か、私は僧が千日回峰行を行なつたと聞いてもさほど驚かなかつたのである。しかし、この行は満願達成した者が、わずかに五十人にも満たないような凄行であると、この僧は言つた



投稿「川柳」

真本 嘉代子

- 年一度恵比寿大黒えべっさん
- 古時計夫婦の歴史刻み込み
- 志望校目ざし戦う受験生
- 悩まずに心の窓を開こうよ
- 成せば成るマイナスは嫌頑張ろう

読者からのたより

◇ あなたの文章も趣向も楽しく読ませてもらってます。私は明日に元気がです。

大蔵司 Iさん

◇ 老人ホームから帰ったらYさんからの便り、益々お元気で高槻音頭を踊っているって、ああ羨ましい。私なんか老人ホームを出たり入ったり…、すっかりババア仲間の一員です。福知山音頭の本場で夏場は、それはそれは賑やかでたいしたもんでしたね。

福知山市 Aさん

元旦・雑煮振る舞いの報告

先の「芥川だより」でご案内した「初雑煮振る舞い」を元旦に行ないました。当日は風も弱く気温も寒すぎず、七輪の炭で焼く餅は、ことのほか美味く、お神酒もすすみ、初めての催しにしては上々の出来でした。お手伝いしていただいた方々や来店していただいた皆さんに厚くお礼申し上げます。

失礼かと思いましたが、背に腹をかえることが出来ず、芥川だよりのカンパ箱を置きましたが、みなさん協力していただき紙代の一部を賄えました。八〇食分ほど食べていただきました。「来年もしよう」という声も聞きました。

幾人かの愛読者の方々に初めて話を聞かせてもらいました。「すぐそのマリヤ地蔵さんと呼ぶ地蔵さんは、白く化粧をされている。地蔵さんを白く化粧する風習は若狭沿岸に多く見られ、畿内にも一部見られるが、芥川界限にはわりと多い」などと話が続きました。ささやかな催しでしたが、田舎の正月明けのドント焼きを思い出させるような、みなさんから暖かい気持と励ましをもらい今年一年頑張りたい。

高槻ぶんか辞典③

芥川一里塚・芥川宿・芥川桜堤

横山 高治

昔の人は、よく旅をした。徳川幕府が封建支配にあえぐ国民に不満の“ガス抜き”をしたのだろう。大山参り、お伊勢参り、「旅笠道中」なんてものも大変、盛んになった。幕府は街道を制定し、諸藩は沿道を整備した。高槻界わいでは西国街道、芥川宿がその名残で、探せば史跡もある。

◆芥川一里塚

幕府は街道のポイントとして、一里(四キロ)ごとに、街道の両脇に塚(小山)を築き、榎を植えて街道の目印にした。高槻には芥川と梶原にあったが、今は芥川三丁目、芥川郵便局の南約百メートルに、西国街道・芥川宿東口の東側だけが残っている。

お社のような祠と立て看板と榎と石碑が、それでも物語めいた風情をたたえている。近所の人たちが綺麗に清掃され、平成五年三月、大阪府の史跡に指定された。

◆芥川宿

西国街道の芥川一里塚から芥川橋までの四百メートルに芥川宿があった。いや芥川本陣も姿を消し、すっかり

商店街と民家の通りに変貌しているが、わずかに残る格子窓の二階に昔の面影をただよわせている。

雑貨の老舗、「金時堂」さんやお酒の「西田本店」、お米の「田淵商店」、はスーパーに負けず、頑張って市民の生活を助けておられる。

◆芥川桜堤

芥川橋を西に渡って、清福寺町の芥川畔は市内一番の桜並木である。清流に映えて、四月は桜、五月は鯉のぼりがひるがえり、一年中、子供たちの川遊びの舞台でもある。

お花見シーズン。焼肉パーティーやポリュームいっぱいダンス風景は、ツヤ消しだが、市民の憩いの場と言え、ばそれも結構。

清流の北の果てには、緑滴る北摂連山が芝居の書割のように美しい。

(天神町・歴史作家。「藤堂高虎」「蒲生氏郷」など著書多数)

編集後記

おかげさまで、7号です。困った時、楽しい時も「芥川だより」が頼りやと思っただけのように今年も発行します。読者である「あなたひとりのために」心に響くメッセージを伝えていきたいと思しますので応援お願いします。(嘉)